広島大学　大学教育研究センター　大学論集
第27集（1997年度）1998年３月発行：47－68

中国における少数民族文化尊重理念の展開

――延辺大学をとりまく言語問題――

小　川　佳　万

目　次

はじめに
１．延辺における朝鮮人と朝鮮語
２．朝鮮族としての朝鮮語
３．二言語教育の可能性と朝鮮語教育制度の整備
４．朝鮮族としての漢語
むすび

中国における少数民族文化尊重理念の展開

——延辺大学をとりまく言語問題——

小 川 佳 万*

はじめに

中国に居住する朝鮮人（族）のために設置されたという経緯を持つ延辺大学は，吉林省延辺朝鮮族自治州に位置し，現在でも朝鮮族学生が多数を占める自他共に認める少数民族高等教育機関である。校内で暮らす教職員・学生は朝鮮族であれば当然のこととして朝鮮語で意志疎通を行っている。つまり日常的にはほとんど朝鮮語しか聞くことはない。ところがその一方で授業になると漢語を教授言語として使用することが一般的になる。これはどうしてであろうか。自ら朝鮮族のための少数民族高等教育機関であると認めるのであれば，なぜ朝鮮語のみで教授しようとしないのであろうか。本論はこの点を議論の中心として，少数民族言語の一つである朝鮮語と中国の「通用語」である漢語の関係を考察することにする。ただし，この問題を考察するにあたって，大学内の現象のみに注目していたのでは大局的に迫ることが難しく，事の本質を見誤るおそれがあるため，広く延辺大学をとりまく延辺朝鮮族自治州の問題として考察することにしたい。言い換えれば，この問題は，中共の「民族平等」理念の一つである少数民族文化の尊重が少数民族地区でどのように展開していったのかを，延辺朝鮮族自治州という具体的な少数民族地区を事例として考察しようとすることである。

延辺朝鮮族自治州は北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)，ロシアと国境を接する中国の東北端に位置している。周知のとおり，ここは日本の敗戦まで満州国内の一地区であり，朝鮮半島から移住してきた朝鮮人の主たる移住先でもあった。しかもこの地域は1950年代まで，朝鮮人（族）の人口が中国人（漢族）を上回るという名実の伴った朝鮮族地区であり，中華人民共和国建国以前から他の地区に勝るとも劣らないほど学校建設の盛んな地区であった。したがって，中国における少数民族文化尊重問題を考えていく場合，最も適した地区の一つであると言える。

1949年以前の清朝時代，中華民国時代，満州国時代とは対照的に，中共の時代，つまり中華人民共和国建国以後，朝鮮族の文化は中共によって尊重されてきたと一般に言われている。もちろん，それが建国時の「共同綱領」,「憲法」で高らかに宣言された中共の少数民族に対する崇高な基本政策の一つであることは言うまでもない。だが，後述するとおり，その後50年近くの道のりが順調かつ平坦であったとは決して言うことはできない。では，具体的にどのような問題が起こったのであろうか。そしてそれはなぜ起こったのであろうか。本論は，こうした問題を検討することによって，少数民族文化の尊重が中国社会においてどのような意味を有しているのかを考察することにする。そしてこの考察は，明らかに少数民族文化を攻撃した時期そのものよりも，文革後，少数民族文化

＊広島大学大学教育研究センター助手

尊重が声高に叫ばれる近年の動向に有効な視点を提供することを目指すものである。

ところで，一般に文化の概念は広く，文化を一義的に定義することは難しい。だが，中共の様々な文献に目を通せば，中共が少数民族文化を大きく，言語，宗教，風俗習慣に分けていることがわかる。この分類に従えば，学校教育において，少数民族文化が問題になるのは少数民族言語である。なぜなら中国の学校は，中共自身も主張するとおり，科学（数学，物理，化学など）を教える近代教育を行うところであり，マルクス主義の無神論観と真っ向から対立する宗教科目（もちろん学校外では許されている）や，「後れたもの」と考えられている少数民族の伝統的な風俗習慣を学校でわざわざ教えることは基本的にないからである。それは，これまで学校が少数民族言語の扱いを争点として現実に展開してきたことからも明らかである。

そこで本論では特に延辺地区の学校における朝鮮語の扱われ方に焦点を絞って論を進めていく。具体的には，第一に中共の少数民族政策をより明確なものにするため，中華人民共和国建国以前に遡り，延辺において朝鮮語がどのように扱われてきたのか（少数民族言語を尊重しないとはどういうことか）を論じる。第二にその後，中共によって朝鮮語はどのように尊重されたのか，あるいは攻撃されてきたのかについて論じる。第三に，延辺地区での漢語と朝鮮語の問題，つまり二言語教育の可能性について考察し，最後に，激動を経験した朝鮮族がむしろ積極的に漢語を取り入れていることは少数民族言語の尊重とどのような関係にあるのか，について考察する。

1．延辺における朝鮮人と朝鮮語

(1) 朝鮮人人口の増加

延辺[1]は，満州族の聖地であり，長い間一般人立ち入り禁止の「封禁の地」であったことに加えて，地理的に辺境に位置していたため，この地域の人口増加が起こるのは，清朝政府が封禁政策を解除する19世紀末を待たねばならなかった。

清朝政府が封禁政策を解除したのは，ロシア帝国主義が目と鼻の先にまで迫り，それに対処する政治的な背景があったが，そればかりではない。南からは朝鮮を保護下に置き，その後植民地にした日本帝国主義が迫っており，延辺は地理的に非常に複雑な地域であったと言える。

実質的に国境の河となっていた鴨緑江・豆満江を越える朝鮮人が急増し出したのは，1869－71年の朝鮮北部で起こった大飢饉からであると言われるが，さらに李朝の圧政，清朝側の封禁政策の解除という要因が重なって，中国へ移住する朝鮮人は増加の一途を辿り，中国内の朝鮮人（原語「韓人」）は，1910年代ですでに100万人を越えていた。もちろん，延辺でも朝鮮人の人口は，1907年（光緒33年）で7万3000人，1912年（民国元年）で16万3000人，1918年で25万3961人，1922年で32万3806人，1926年で35万6210人と着実に増加していったのである[2]。

そしてこの数字は延辺の中国人（漢族）のそれを上回るものであった。例えば，民国十五年（1926年）の調査で延辺の総人口は44万4420人であり，そのうち中国人（原語華人）が8万6121人，朝鮮人（原語韓人）が35万6210人と，圧倒的に朝鮮人が多かったのである。この傾向は1950年代末まで続き，名実ともに延辺は朝鮮人地区だったと言える。

では，その延辺にいた朝鮮人はどのような人たちであったのであろうか。ロシアと朝鮮に挟まれた複雑な地域を反映してか，朝鮮人の流動率も高かったようであるが，当時の愛国主義者沈茹秋によれば大きく5種類に分類できる[3]。第一が農民・商人・労働者，第二が民族主義思想をもつ独立運動家，第三が共産党及び類似の社会主義者，第四が日本の手先か類似の親日派，第五が中国に帰化した者，の5種類であるという。この中で一番多かったのは第一の農商工民であり，全体の約8割を占めていたという。そして移住の理由も多くが「生活難」であった[4]。ただし，朝鮮人全体数からみると少数ではあるが，朝鮮人教育の問題を考える場合，重要になってくるのは日本の朝鮮半島支配を嫌って移住してきた第二の人々であった。

(2) 学校開設運動

延辺大学の朴泰洙が中華人民共和国建国以前の朝鮮族教育の特徴として第一に指摘しているように[5]，延辺地区には解放前から数多くの朝鮮人学校があった[6]。これが，解放前にイ族学校がほとんどなかった四川省の涼山イ族自治州と大きく異なるところである。しかも延辺地区では，1910年代の半ばにしてすでに「学校が多すぎる」[7]状態であったのである。「学校を改良するにはまず学校を減らすことである」と延辺地区を調査した沈茹秋は『延辺調査実録』に記しているほどである[8]。このことは，彼らの民族意識・情熱がまず学校建設に向かったことを示している。

この朝鮮人をして学校設置へと駆り立てたのは，言いかえると民族意識を高揚させたのは，日本が朝鮮を保護国下及び植民地にしたことに関係する。つまり反日朝鮮知識人が中国に移住したことによって朝鮮人学校が増加してきたのである[9]。延辺における朝鮮人による朝鮮学校の始まりは，ハーグ密使事件で有名な李相卨が1906年に龍井に設立した瑞甸書塾であった。その後，昌東義塾（1907年），光成義塾（1908年）等著名な学校を含め，延辺各地で学校設置ラッシュが始まるが，それが1926年時点で207校，8987人の学生を抱えるまでに成長した。これらの私立学校は，民族主義的，反日的であるため，当然のこととして朝鮮語が教授言語であった。崔斌子が指摘するとおり[10]，朝鮮人私立学校の特徴は，第一に反日愛国思想を持っていたこと，第二に近代科学の成果を取り入れ，自然科学方面の内容を重視したことなどである。初期の頃は，まだ儒学の影響が残っていたが，1920年代に入り，マルクス主義の影響を受け出すと，これらの学校は革命人材の養成所という機能を明確にしていく。そしてそのことと反比例して儒学的なものも学校から消えていくのである[11]。

また，延辺地区のそれ以外の学校としては大きく3種類に分類できる。第一が清朝政府・民国政府管轄の中国学校である。だが，両政府とも朝鮮人に対する基本的な態度は「一視同仁」であり，朝鮮人に対して特別な配慮をするものではなかった。この種類の学校は，1904年に局子街（延吉）に建てられた北山中学堂が始めとされるが，漢語で教えるこの種の学校は中国人（漢族）を吸収しただけでなく，特に韓国併合によって「日本人」になった朝鮮人に中国政府が中国への帰化を勧めたため，そうした朝鮮人を受け入れることによって拡大していった。1926年時点で173校，学生数1万855人（韓生6549人）と学生総数では朝鮮人による朝鮮人学校を上回っていた。この種の学校は，特に1908年から一律に規定された教材を用いて，漢語での授業を行っていて，朝鮮人に対して特別な措置（例えば，朝鮮語科目の開設など）を採ろうとする考え方は基本的になかった。

第二が西洋の宗教人が建てた朝鮮人学校である。カナダの長老派やドイツのカトリック系が教会を拠点として各レベルの学校を建てたが，これらの学校は，宗教関連の課目と宗教儀式以外，基本的に朝鮮人私立学校と同じ教科書を使っていた[12]と言われる。ただ朝鮮人私立学校を含めたこれら4種類の中で最も少数であった（1926年時点で20校，学生数1174人）。

こうした事態を日本政府側（朝鮮総督府）は手をこまねいて見ていたのではなく，朝鮮人は「日本人」であるという理由でむしろ積極的に関与してきた。間島中央学校（1908年）を始めとして各地に朝鮮人学校を順次設置していき，そこで日本語を教えるという対抗措置をとった（33校，学生数4508人（韓生4488人））[13]。またここに分類されるものとして日本人を長とする光明会が建てた宗教的な朝鮮人学校（実質的に朝鮮総督府の影響下にある学校6校，学生数1005人（韓生990人））もあった。

(3) 朝鮮人学校に対する中国・日本の対応

以上のような様々なタイプの学校の共存という状態が満州国建国時まで続くのであるが，日本帝国主義同様，民国政府は，朝鮮人にとって決してプラスに働くものではなかった。なぜなら民国政府は朝鮮人が建てた朝鮮人学校を放任するのではなく，当初から墾民書堂改良会等を設立して民国政府の統制下に置こうとしてきたからである。例えば，1915年に延吉道尹・陶彬が制定した「画一墾民教育弁法」，1925年に奉天，吉林両省から「東辺道各縣閉鎖朝鮮人学校条例」が出され，さらに1930年に「取締延辺墾民私立学校弁法」が出されるなど，朝鮮語などの例外を除いて，私立学校も授業内容を統一規定に従わせることや，漢語教材の採用，中国人教師の任用，朝鮮人学校の閉鎖や公立学校への改組など恒常的に圧力をかけてきた[14]。このため，この動きに反対する朝鮮人は，延吉縣墾民教育研究会を組織し，朝鮮人学校には朝鮮語及び朝鮮歴史と地理等の正規教育課程を開設しなければならないことを民国政府に求めた[15]。このことは，李採畛も述べているとおり，日本も中国も，朝鮮人学校の価値とか充実には関心を持っていなかった[16]ことを示しているのであり，言いかえれば，朝鮮人教育は「常に，満州における中国と日本の抗争の中核となっていた」[17]のである。したがって，朝鮮人学校は常に存亡の危機に立たされながら，自らのアイデンティティの象徴として，朝鮮人自身によって維持されなければならなかったのである。そして，その後の歴史が示すとおり，延辺を支配下においたのは日本帝国主義であった。

1931年に実質的に日本の傀儡国家であった満州国が建国されると，満州国政府は，あらゆる学校を管轄下におくため，先ず私立学校を公立学校に再編成していった[18]。この過程によって朝鮮人学校は一律に朝鮮総督府管轄下の普通学校となり，このことはまた民国政府によって正式に認められていた朝鮮語が延辺地区の学校から消え，朝鮮人学校の教授言語は日本語になった（漢族学校は，漢語と日本語）ことを意味した。さらに朝鮮人が満州国国民になった1937年に朝鮮人学校は間島省の管轄に移り，翌1938年に新学制が発布されると，その下で「修身」，「建国精神」，「日本歴史」などを朝鮮人に強要し，小学校高学年では，日本語の使用と朝鮮語の禁止，さらに違反者には罰則まで設ける徹底した政策を実施した[19]。その後，延辺の学校に朝鮮語が戻ってくるのは日本の敗戦を待たなければならなかったのである。

このようにみてくると，日本帝国主義の朝鮮語弾圧は朝鮮人のアイデンティティを抹殺しようとした点において朝鮮人にとって最大の災難であり，このことは当然非難されるべき行為であることは言うまでもないが，問題はこのことにとどまらず，延辺の中国人とも敵対関係になりやすかったという意味で朝鮮人は常に微妙な立場にいたことであった。なぜなら，当初，日本官憲による朝鮮人「保護」が，中国人には，朝鮮人が日本帝国主義の東北侵略の尖兵であると見えたこと，さらに，朝鮮人農民の大多数が中国人地主の小作農であるという実態が，容易に階級問題が民族問題になりえる根拠となったからである。

実際，中国人（漢族）と朝鮮人（朝鮮族）との間の摩擦が幾度となく繰り返されてきた。そして実は1952年に誕生する延辺朝鮮族自治州（その当時は自治区）が，繰り返す摩擦の中で1936年に結成された在満韓人祖国光復会によって出された「韓人自治」の実現をうたう宣言に源を発したものであったのである。したがって延辺朝鮮族自治州と朝鮮族による自治は，中共が無条件で朝鮮族に対して与えたとみるよりも，姜在彦も指摘するとおり，「「反満抗日」のための中国民衆との連帯運動によってかちとった果実」[20]であったとみる方がより実態に近いと言えるのである。

2．朝鮮族としての朝鮮語

(1) 朝鮮語教育体系の制度化　－延辺朝鮮族自治州の成立－

中共の出自が，日本帝国主義（満州国政府）はもちろんのこと，民国政府や国民党の否定であったことを鑑みれば，それらが否定的な態度を示したその朝鮮語を逆に積極的に認めることによって自らの存在価値を示してきたのも当然であった。学校から朝鮮語が消えた1930年代の満州東部（東満）のゲリラ根拠地では，当時すでに中共の指導のもと30余の学校で，朝鮮語による教材や朝鮮語の授業が行われていた[21]。ただし，朝鮮語が学校教育の中に本格的に復活するのは，この地区が解放される年，つまり，1945年の日本の敗戦を待たねばならなかった。

朝鮮人の学校設置の願いは，解放後中共の指導の下で，日本の学校を接収したり，「民弁公助」，「以民教民」の方針で各地に設置することによって急速に実現していった。しかも翌1946年にはすでに学校数において満州国時代の最高水準を越えた[22]ほどのスピードであった。当然のことながら，朝鮮族学校は初等教育から高等教育まで朝鮮語が教授言語として認められ，1949年に朝鮮語を教授言語とする高等教育機関－延辺大学が誕生したことにより，幼稚園から大学までの朝鮮語による教育体系が中華人民共和国建国直前に早くも完成することになる。

この朝鮮語（民族語）による教育制度は，1951年の第一次全国民族教育会議によっても中共の基本的政策として承認され，朝鮮族，漢族を分けた単一民族学校の維持および朝鮮族と漢族の混成学校であった班（クラス）を民族別に分けることによって，朝鮮語を消滅させないようにした。朝鮮語を教授言語にすることは，朝鮮族側の願いであり，これまでの中共の少数民族政策の到達点であった。

このような学校設置と並行して，朝鮮語のためのインフラ整備の一環として，1946年延吉朝鮮文教材編集委員会が成立し，翌1947年に延辺教育出版社も創設され，朝鮮語の教科書と（朝鮮族用の）

漢語の教科書をここで編集し，さらにそれ以外の教科については，全国統一の教科書をここで朝鮮語に翻訳して出版することが決まった。

そして，これら一連の仕上げが，1952年に公布された中華人民共和国民族区域自治実施綱要であり，同年の延辺朝鮮族自治区（1955年に自治州に改称）の誕生であった。このことによって，朝鮮語は朝鮮族が話す言葉から，自治州の官庁，学校等で用いられる公的言語に「昇格」したのである。

(2) 中国人としての朝鮮族

しかし，こうした急激な朝鮮族化の一方で，それら民族化を牽制する動きも同時に進行していた。周知のとおり，中華人民共和国の建国は，延辺が中国の一部分であり，朝鮮人が中国の朝鮮族になったことを内外に宣言するものであった。それはまた朝鮮族にとってこれまで不明確であった，いやおそらく大多数の朝鮮人にとって朝鮮を意味していた祖国概念を中国に移すことも意味した。事実，解放後の朝鮮人（族）小学校で，「歴史」科目は「朝鮮歴史」を，「地理」科目は「朝鮮地理」を現実に意味し，実際教えられてきたからである。

したがって，一見するととどまるところを知らない朝鮮族化の動きに対して，中共はどこまでも無制限に認めたのではなかったことは中国人としての朝鮮族という観点からすれば当然のことであった。

まず最初に行ったことは，解放以後多数設置された民営(民弁)，つまり私立の朝鮮族学校を1950年から順次公立に変え，朝鮮人学校の数を制限して量的に拡大しないようにしたことである。つまり漢族学校との対比によって，朝鮮族学校だけが拡大しないように注意が払われたのである[23]。おそらく量的なバランスを保とうとする力がはたらいたことは，後に圧倒的に朝鮮族が多かった延辺に敦化という漢族地区を1958年に編入させて，人口のバランスをとろうとしたことから，容易に予想できる。

そして二番目として，これは大変重要であるが，朝鮮族小学校の5学年以上の全朝鮮人生徒に漢語の学習を課したことである。これは，1951年に開かれた全国第一次少数民族教育会議でも，漢語は少数民族学校の必修課程であることを確認している。

三番目は科目名の変更であった。当時朝鮮族小学校で「語文」とは朝鮮語（当時「韓語」と呼ばれた）を意味し，漢語は「中語」と呼ばれていたものを，「語文」とは「漢語」であるというように名称統一を図った。

そして最後の四番目として，「朝鮮族の祖国観を養い，外国人であると考えないために」（教育部指示），朝鮮族学校では，朝鮮の歴史と地理を教えていた科目，すなわち「朝鮮歴史」と「朝鮮地理」を1953年に廃止した。このため「歴史」は中国の歴史を「地理」は中国の地理を意味することになり[24]，従来の朝鮮歴史は世界史の一部となり，朝鮮地理は世界地理の一部分となった。この時点から朝鮮語，（朝鮮族用）漢語，外国語以外は，全国統一の教学計画に従うことになったのである[25]。

(3) 朝鮮語教育の後退 －大躍進期と文化大革命期－

朝鮮人の朝鮮族化（中国人化）にも関わらず，朝鮮族の教育熱と中共の政策は完全にかみ合い，

延辺朝鮮族自治州が誕生した年に早くも初等教育の普及が完成し，1958年には初級中学の普及が完成する[26]。この快挙はこの時期全国的にみても異例のことであり，そのため延辺は特に教育の模範地区と称され，さらに少数民族教育が進んでいくかにみえた。

しかし政治変動に少数民族教育は無力だった。1956年からの民族整風運動により，地方民族主義批判が起こると，朝鮮族教師がまず批判の対象としてやり玉にあがり，漢語を使える教師には漢語を教授言語とすることが求められた[27]。確かに彼ら教師の中には民族言語の純粋化を主張（朝鮮語から中国語の影響を取り除いて純粋の伝統的な形を回復すべきであるとする主張）をするものがいたのであるが，彼らに対する批判は予想以上に強く，それに伴って朝鮮語の時間が縮小され，漢族の進んだ文化と経験から学ぶために漢語の学習時間を増加することが要求されたのである[28]。こうして漢語の学習開始が第1学年の後期から始まることになった[29]。

当時しきりに叫ばれた「民族融合」のスローガンは実質的に「言語融合」と同義であり[30]，「民族融合」は漢族化を，「言語融合」は漢語化を意味した。この時点から朝鮮族学校は「朝鮮語を主として漢語を学ぶ」方針から「漢語を主として朝鮮語を学ぶ」方針に大きく転換し，教授言語を漢語とすることになったのであった。さらにこれに伴って，朝鮮語の教材はほぼ全部（95.9%）漢語のそれを翻訳したものという極端な漢語偏重が始まったのである[31]。

また，この時期，民族別に分かれていた朝鮮族学校と漢族学校を統合することも行われたが，その最も象徴的な出来事は朝鮮族のための高等教育機関として設置された延辺大学に漢族が入学したことであった。延辺大学は朝鮮族のシンボルとして1949年から1956年まで全て朝鮮族の学生で占められ，教材は全て朝鮮語で編纂されたものであった。それが1957年に漢族教職員が配置されたことに始まり，1958年には中文専業に初めて漢族学生が入学し[32]，その後漢族学生は各専業に入学していくのである。

もちろん，こうした極端な傾向は長く続かず，一旦は穏健的な政策に戻る（1962年民族連合学校を漢族学校と朝鮮族学校に分離　朝鮮族の1年生に対する漢語の授業を全廃）。しかし，1966年に文化大革命が始まると，朝鮮語はまた攻撃の対象になった。文革時代の論調としては「10年，15年経てば，朝鮮語，朝鮮文は必要なくなる。」という朝鮮語無用論が声高に叫ばれ，学校によっては朝鮮語廃止もしくは朝鮮語の使用禁止という事態にまで発展した。民族教育は「売国」教育，「裏切り者」教育，さらには「民族分裂主義」教育と非難された[33]。階級社会を否定し，階級制度こそ攻撃の対象であるとした中共は，「民族」を「階級」として扱い，攻撃の対象としたからである。

50年代末から漢族学生も入学し，1962年には全講座の45%が漢語で行われていた延辺大学は，この文革時に朝鮮語課以外をすべて漢語で教授するように変更し[34]，入学者の民族別比率を漢族70%，朝鮮族30%に完全に逆転した（文革後はその割合が，漢族30%，朝鮮族70%に再逆転する[35]）。

こうした極端な朝鮮族・朝鮮語に対する迫害が完全に終結するのは，他の地区と同様，文革の終結と時を同じくしてであった。文革の終結によって，延辺では三度び朝鮮族学校が認められ，朝鮮語が復活して現在に至っているのであるが，朝鮮族にとっての災難は中共の少数民族文化の尊重が政治変動の前に無力であることをいみじくも暴露したものであり，朝鮮族にとって大躍進期・文革期の朝鮮語攻撃は解放前の満州国時代を思わせるものであったに相違ない。

3．二言語教育の可能性と朝鮮語教育制度の整備

(1) 漢語と朝鮮語の割合の変化 －中共の意図－

朝鮮語攻撃という激動の時代が去った延辺において，朝鮮族が学んだ教訓は，「朝鮮語至上論」でもなく，ましてや「朝鮮語無用論」でもない，両者のバランスを取りながら，どこまでも進んで行くしかないということであった。それは，朝鮮族にとって，朝鮮語・漢語の二言語に精通しなければならないということであり，中華人民共和国の建国とともに表れた理想であった。例えば1950年に出された「少数民族幹部試行方案」において民族学院の卒業生は民族語，漢語の両方とも使える人材を求めていることからもわかるのである。

では激しい朝鮮語攻撃の一方で通用語としての漢語はどのように扱われてきたのであろうか。朝鮮語攻撃の時期だけでなく，朝鮮語に対して穏健な政策がとられてきた時期に漢語はどのような位置を占めてきたのであろうか。以下では，建国前後からの学校教育における朝鮮語と漢語の関係について述べていくことにする。

表－1は，朝鮮族小学校の教育課程において，朝鮮語文と漢語文の授業時間数の平均がどのように変わってきたのかを示したものである。(漢族小学校には朝鮮語文の授業はないのでこの問題はな

表－1 延辺の朝鮮族小学校1週間あたりの時間数の平均

年	朝鮮語文	漢 語 文	年 制	漢語文の開始学年	総時間数
1947	6	2	6	2	
1950	9.3	1	6	5	27.7
1953				2	
1955	11	2.7	6	3	
1958				1	
1959	10.7	4	6	3	
1960	9.3	4.2	6	3	
1963	9.5	6.2	6	2，3	33.5
1976	6	5.6	5	1	26.4
1981	8.4	4.8	5	2	35.4
1983	8.2	4.2	6	2	
1985	8.2	3.3	6	2	34.6

出所）『延吉教育志（1901-1988）』，『延辺朝鮮族自治州教育志 1715-1988』より作成。

い。）この表の平均値は，例えば6年制小学校であれば，各学年の1週間あたりの朝鮮語文の時間数である。つまり1学年あたりの1週間の時間数を表していることになる。

この表－1から明らかになることは，50年代の朝鮮語文と漢語文の時間数が極端に開いていたこ

とである。このことは当時漢語文がそれほど重視されていなかったことを示しているのであるが，この極端な差が60年前後からやや接近し，70年代中盤の文革末期にはほぼ同じ数字にまで上昇している。これは，当然のことながら漢語文が朝鮮語文と同様な位置を占めるまでに重視されてきたことを示すものであるが，それが80年代から再びその差が開いている。この朝鮮語文時間数の上昇は再び朝鮮語文が重視されてきたことを示すものである。一方，漢語文の状況は，大雑把に漢語無視の時期，重視の時期，中庸の時期と変遷してきたと言えるであろう。

また，いつ漢語文学習を開始するのかに注目すると，1950年では小学校第5学年から始まっていた漢語文の学習が，1956年からは第3学年から，1963年からは第2学年からとしだいに開始学年が早まっていることがわかる[36]。これは漢語文が次第に重視されてきたことを示す一つの証拠であろう。大躍進期・文革期の第1学年からという時期を経て，文革後は，ほぼ一貫して第2学年から漢語文を始めるのが一般的である[37]。

だが，この傾向は，中等教育になると異なってくる。

この表－2の平均値も表－1と同じ方法で出したものである。建国当時，確かに小学校と同様，まだ朝鮮語文の時間数の方が上回っていた。しかし，50年代後半になるとこれが逆転し，漢語文の

表－2　延辺の朝鮮族中学校1週間あたりの時間数の平均

年	年　制	朝鮮語文	漢語文	
1948	6	5	3	
1949	初中3年	6	3	
1957	初中3年	4	5	
1959	6	4.7	5.5	
1960	5	1.8	6.6	
1961	6	3.7	6.5	
1963	6	4.7	6.5	
1971	4	3.3	6	
1978	5	3.4	6.6	
1981		4.2	5	文　科

出所）『延吉教育志（1901-1988）』，『延辺朝鮮族自治州教育志　1715-1988』より作成。

時間数の方が上回ってくる。そしてこの傾向は朝鮮語尊重が叫ばれる近年でも変わっていないのである。細かくみれば，1960年のようにその差が極端に開いた時期，やや開いた時期（61，63，71，78年）を経て，若干接近した時期（81年）に分けることができるが，いずれにせよ，漢語文の時間数が朝鮮語文のそれを上回るという状態が続いている。ここから，朝鮮族学校の中等教育段階では，逆に漢語の方に力を入れているということが言えそうである。

(2) 二言語修得の困難さ

朝鮮語を母語としてその発展を目指しながらも，漢語に精通するという二言語主義は朝鮮族が至った結論である。しかし，二言語主義は簡単に達成できる目標なのであろうか。少なくとも西洋世界では二言語主義の困難さを露呈するような研究報告がなされている中で，延辺は特異な地区なのであろうか。

まず，延辺の朝鮮族は，どの程度朝鮮語を使用しているのであろうか。近年の抽出調査によれば，延辺では，漢族と接触の機会の多い都市部の朝鮮族で74%，漢族との接触の機会の少ない農村部の朝鮮族で95.6%が朝鮮語を日常使っているという結果がでている。基本的に漢族と交流しなければ漢語を使うことはないのであるから，漢族人口が現在6割に達している延辺でも朝鮮族は日常的に漢語を使う機会はそれほど多くない，つまり朝鮮語だけで事足りてしまう結果になっているといえる。その中で，反対に漢語しか使わない朝鮮族は都市部で14%，農村部で1.9%になっているという[38]。

では，多数の朝鮮族は，日常的に漢語を使わないにしても，どの程度漢語がわかるのであろうか。以下の表は，その一例である。

この表－3にあるサンプリング場所は下にいくほど，漢族と接触の少なくなる地域(つまり農村)であるが，この表から日常的に漢族と交流する機会がほとんどなければ，漢語を解しない人が多い

表－3 延辺朝鮮族自治州における言語理解に関する抽出調査(1)

サンプリング場所	サンプル数	回答者数	朝鮮語理解人数			漢語理解人数		
			わかる	少しわかる	わからない	わかる	少しわかる	わからない
延吉市光明街9居3，4，5組	282	266	266	0	0	124	59	83
龍井縣光新郷光新村	233	226	226	0	0	46	78	102
安図縣石門鎮	254	250	250	0	0	34	10	206
合計	769	742	742	0	0	204	147	391

出所)『中国少数民族語言使用情況』，1994年，214頁。

のも納得がいくところである。漢族が半数近くを占める延吉市内でも漢語がわからない人が83人もいることは，延吉市では基本的に朝鮮語で十分用が足せてしまうことを意味している。こうみてくると，朝鮮語，漢語とも完全にわかる人は延吉市内で半数近く，他の2カ所（農村部）では，2割弱であることがわかり，90年代でも予想以上に少ない。

この傾向は，これが読み・書き能力になっても同様である。

漢語は言うに及ばず，朝鮮語の読み・書きになると，普段朝鮮語を話している人たちの中にも非識字者が出てくるのが以下の表－4からわかるが，ここから二言語とも読んで，書いて，話すことができる，つまり二言語に習熟した人は延辺でもそれほど多くないという結論は十分説得力をもちそうである。

表－4　延辺朝鮮族自治州における言語理解に関する抽出調査(2)

サンプリング場所	サンプル数	1-7歳児童数	実際人数	朝鮮語理解人数			漢語理解人数		
				脱盲	半文盲	文盲	脱盲	半文盲	文盲
延吉市光明街9居3，4，5組	282	36	246	225	15	6	128	50	68
龍井縣光新郷光新村	233	25	208	182	6	20	41	83	84
安図縣石門鎮	254	27	227	198	5	24	30	13	184
合計	769	88	681	605	26	50	199	146	336

出所)『中国少数民族語言使用情況』，1994年，214頁。

一方，自校の学生を対象に調査を行った延辺大学では，まず，大学生が朝鮮語，漢語両方が使えるという意味を，朝鮮語が高卒水準であり，漢語が漢族初級中学二年生の水準である（朝鮮族学校の高卒水準）としている[39]。したがって，あいさつができるとか，日常の簡単な会話ができるレベルをその言語に習熟しているとは言わない，つまり，大学生は，当然のこととして，学習指導要領(教学大綱）に基づいた高級中学卒業レベルをクリアーしていなくてはならないのである。

この点をふまえての延辺大学の調査では，朝鮮族学校で小学校から高級中学まで来た学生229人の朝鮮語の水準はほぼ高卒の水準に達している（うち225人が合格）が，漢語は67人が朝鮮族高級中学の卒業水準に達していない。つまり大学での学習に支障をきたす人たちなのである。

一方，小学校，初級中学が朝鮮族学校で，高級中学を漢族学校にした学生は7人いて，彼らは朝鮮語は初級中学卒業の水準を満たし，漢語の方も大学での授業に基本的には問題ないが，漢族学校の高卒の水準には達しない。両方とも一応の水準にあるが，どちらとも自由に操れる状態にはなっていないという。

さらに，小学校を朝鮮族小学校で，初級・高級中学を漢族学校で学んだ学生（15人）の場合，朝鮮語の水準は低く，彼らの第一言語は漢語となっている。だが多数は漢語も漢族学校の高級中学卒業水準には達していないという。

最後に，小学校から高級中学まですべて漢族学校で学んだ学生（46人）はほぼ漢族学生の漢語の水準に達している。だが，朝鮮語を解しないという。

こうした結果をまとめると，二言語に精通している学生（朝鮮語が高卒水準，漢語が漢族学校の初級中学2年水準）は74人（25%）しかいないということである。つまり，大学生レベルでも，二言語に精通することはそれほどたやすいことではないのである。そのことを以上の調査は示しているのである。そしてそれは，朝鮮族だけに限らず，他の少数民族が漢語を学ぶことが決して容易いことではないことをも示しているのである。漢語は中国社会で生きていく上で重要である。しかし漢語を自由に使いこなすことは難しい。ここに朝鮮族の大きなジレンマがあるのである。

(3) 朝鮮語教育制度の整備

延辺では，公的機関，例えば学校，会社などの看板は，朝鮮語・漢語の両方で表示されている。

これは二言語主義が法的に公認されていることを示す一つの例である。ただし，このような例によって二言語が対等に共存していると考えるのは早計である。

言語に関する中国的特質とは，漢語が中核にあり，漢語を媒介にして漢族および他の民族が接していることである。つまり朝鮮語が漢語のような中国の「通用語（＝国語）」になることはないのである。中国12億人の実に92％が漢語を母語として使っていることは動かしようのない厳然たる事実であり，使う人の多寡が言語の力を決定する面を否定はできない。

そしてこのことは，圧倒的に朝鮮族（人）が多かった延辺であっても，例外とはなりえなかった。朝鮮族が多数を占めていた延辺地区は，中華人民共和国になって，朝鮮族人口は恒常的に低下してきたのである。建国の年の1949年に73.4％を占めていた朝鮮族が，約10年後の1959年には54.9％まで急激に低下した。この主たる原因は1958年に実質的に漢族地区であった敦化市が延辺朝鮮族自治州に編入されたことである。その理由は，明らかにされていないが，おそらく政府の方で漢族と朝鮮族のバランスをとるためであったと言われている。そしてその後も漢族の流入は進み，1962年にはちょうど朝鮮族と漢族の割合が50.0％ずつになり，文革中の1972年に朝鮮族が，43.2％，文革後の1982年には40.3％，さらに1993年には40.0％にまで低下したのである。延辺の自治州でさえも，朝鮮語で自己完結的な言語空間を作り出すことは難しくなっている。

この漢族人口の増加によって漢語の圧力が高まってきても，朝鮮族が漢語を漢族と同じように修得すること，具体的に言えば，あらゆる漢語の試験において漢族にひけをとらないレベルにすること

表－5　延辺朝鮮族自治州民族別人口の推移

年	朝鮮族	漢族	総人口	朝鮮族の割合
1949	529,258	288,757	835,278	63.4%
1954	555,164	349,355	924,771	60.0%
1959	579,906	454,162	1,050,885	55.2%
1964	623,136	643,855	1,294,629	48.1%
1969	675,939	802,949	1,506,756	44.9%
1974	708,167	929,490	1,668,367	42.4%
1979	725,565	1,027,708	1,784,098	40.7%
1984	775,108	1,097,161	1,912,430	40.5%
1989	834,127	1,152,848	2,041,758	40.9%

註）その他の民族としては，満族，回族，蒙古族等。
出所）延辺朝鮮族自治州計画生育委員会編『延辺人口統計資料彙編』延辺大学出版社，1990年。

とは，理想としては考えられても現実には極めて難しい課題であった。このことは上述したとおりである。

もしこのような情況の下で，朝鮮語を漢語と対等に近づけようとすれば，朝鮮語教育体系を制度

的な面で整備をしていくしかない。

言い換えれば，あいまいな朝鮮文化の尊重，朝鮮語の尊重というスローガンを時の指導者のあいさつことばに終わらせず，実態として朝鮮族の利益に還元する作業が必要になる。その第一歩が法的整備である。それは建国以来存在してきた最高法規としての中国憲法（中央レベル）だけにとどまらず，少数民族地区の側から当該地区（地方レベル）のための法律（条例）を整備することを意味した。このことはまた地方にも一定の自治を持つ権限を明確化することを意味する。文革を経た各少数民族地区が，80年代後半から競うように自らの地区（自治州・自治縣）の自治条例を制定していったのも，中央レベルの政治動向に翻弄されてきた苦い経験からである。それらの自治条例が，中央政治の変動にどれだけ耐えうるかは今後を待たねばならないが，少なくとも法レベルでの区域自治の体裁は整ったことになる。そして，数多くある自治条例の先頭を切ったのも延辺朝鮮族自治州であった[40]。

その自治条例には，自治州の州長は朝鮮族が担い，その他政府の役人は朝鮮族が半数を超えてよいこと（第十六条），自治機関が職務を執行するときには，朝鮮語・漢語両言語とも用いるが，朝鮮語が優先されること（第十八条），また職員は自民族の言語で仕事ができること（同第十八条）が明記されている。

また，もちろん教育面でも，全国統一の普通教育制度に基づきつつ，朝鮮族教育の特徴を併せて，朝鮮族中学・小学の学制，教学計画及び関連学科の教学大綱を確定できること，朝鮮語による各科教材を編集・翻訳出版できること（第五十一条），さらに教授言語別の学校を設置できることおよび朝鮮族・漢族混成の学校でも教授言語別にクラス分けができること（第五十二条）が明記されている。

このような法的整備は一見些細なことであると見過ごされがちであるが，この条例からさらに細かな具体的な政策が決められるため，きわめて重要な変化と言わねばならない。例えば，大学入試の受験にあたって，朝鮮族学生は，文革以前にも朝鮮語で答案を書くことが許されていた。しかし，朝鮮語で答案を書く場合，進学先は延辺内にある高等教育機関3校と中央民族学院（北京市　現中央民族大学）に限られていた[41]。しかも当時朝鮮族の漢語の水準は大変低かったため，漢語で答案を書いてその他の高等教育機関に進学する学生はわずかであったという。

この制限を撤廃したのは，1981年の全国統一入試から再び朝鮮語で参加できることになってからのことである。当然この動きは条例制定の動きと軌を一にしていたことは言うまでもない。そして現在では，朝鮮語で受験した学生は，特に募集要項に明記されていない限り，その地区の漢語で受験した学生同様，どの大学でも選択できることになった（ただし漢語での受験者が日本の国語に相当する「語文（＝漢語）」一教科に対して朝鮮語での受験生は「朝鮮語文」と「漢語文」の二科目を受験しなければならない。）しかも，大学入試では同等の条件下では朝鮮族（及びその他の少数民族）が優先されること（第五十四条），つまり同じ得点であれば朝鮮族を優先して合格させることも示されているのである。

こうして朝鮮語教育制度の整備は，朝鮮語を漢語と平等にすることを目指す上で効果的な手段となっているのである。

4．朝鮮族としての漢語

(1) 朝鮮族からの漢語強化の要請

初等教育から高等教育までの民族教育体系を強化し，朝鮮族の利益を拡大していくには，制度面での保障を拡大する一方で，実は漢語を強化をすることも民族教育制度の存続に不可欠であることも朝鮮族自身学んだのであった。このことは，近年の議論が明らかに漢語能力をどう高めるかについてであることによって明らかになる。「二言語に通じた人材の養成が目標[42]」と発言するとき，問題は漢語をどうするかであって，その逆ではないのである。

延辺のような民族性の強い地域は，皮肉なことに漢語能力が高くない。このことは決して彼らの言語習得能力が低いからではなく，朝鮮語だけで日常生活に問題がないという環境がかえって災いしているからである。しかもここ延辺は他の少数民族地区と異なり，かなり特殊な情況にあった。中共が多くの少数民族地区を解放し，中共政権を樹立したとき，その意図のあるなしに拘わらず，少数民族文化を「後れた」ものとして規定しようとする力が働いていた。したがって少数民族地区を解放することは，すなわち漢族文化を受け入れることであった。それはまた，学校ばかりでなく文字を持たない民族であればなおさら容易に吸収することができた。だが，延辺では中共がこの地を踏む以前から，「進んだ」漢族地区に勝るとも劣らぬほどの近代学校が多数存在し，教育水準も高かった。したがって朝鮮族が漢語を学ぶのは，少なくとも漢族よりも「後れている」と朝鮮族自身が考えているからではない。朝鮮語の図書が少ないため，漢語の能力を高め，漢語の本から情報を仕入れなければならない[43]からである。この情況がある意味ですんなりと漢語が浸透していくのを妨げているのである。

さらに朝鮮族にとってもっと切実な問題は就職に関してである。少数民族文化を尊重する中共の少数民族政策にとって，就職時または昇進時に漢語の能力によって差別するような明確な法的規定は存在しない。しかし，王瑜が指摘するとおり，現実の社会では漢語能力による制限が設けられているのである[44]。朝鮮族の活躍の場が自治州内に限られるのであれば，まだそれほど問題は起こらないが，特に高学歴者にとって活躍の場は州外になることが多いため，その重要性は近年ますます高まっている。延辺の朝鮮族にとって競争相手は州内の人間ではなく，むしろ全国各地の人々だからである。これが，朝鮮族にとっては頭の痛い問題であり，近年の傾向として言えることは，これを克服するために，朝鮮族側から漢語の重要性を指摘していることである。例えば，高級中学段階の朝鮮語を「選修課」にして漢語の時間を強化すべきという意見さえ出ている[45]。

これほど漢語にこだわるのは，朝鮮語教育の今後と密接に関係しているからである。もし漢語を本当に重視するのであれば，朝鮮族学校で漢語を習うよりも漢族学校で学んだ方がよいからである。それでも朝鮮語衰退を怖れるのであれば，やはり漢語も同時に強化せざるを得ないという，ある意味での矛盾を背負わねばならない。それはまた中国人であって朝鮮族であるというダブルアイデンティティを持つ人間に普遍的な課題なのである。

(2)朝鮮族側の現在の結論

これまで幾たびか朝鮮語攻撃を受けてきた朝鮮族にとって母語である朝鮮語を軽視することは絶対に譲れないことである。しかも，朝鮮族のこだわりである朝鮮語重視は，黄薬山によれば，授業時間数において朝鮮語を母語とする北朝鮮の小学校・中学校の時間数（1911時間）よりも多く，小学校段階での語彙数においても北朝鮮，韓国に比べて多くなっている[46]ほど強いものであるという。これだけも朝鮮族の学習負担がどのくらい重いものかが容易に察せられ，黄自身も学習負担の軽減を提案しているほどなのである。

しかし，激動期を経験した朝鮮族が，大きく認識を改めてきたのはむしろ漢語に対してであった。そしてそれは，中国社会で実際に暮らし様々な経験を積んできた朝鮮族自身が学んだ知恵でもあり，朝鮮族のさらなる躍進に避けて通ることのできない課題であった。

朝鮮族学校の特徴として指摘できるのは，小学校第1学年から高級中学第3学年までの全授業時間のうち，朝鮮語文が20.18%（2460時間）を占め，漢語文は小学校第2学年から始め高級中学第3学年まで14.91%（1826時間）を占めている[47]という言語科目重視型の教育課程であることである。漢語も相当重視していることがここからわかるが，この二科目で全体の3分の1以上を占め，他の教科は漢族学校と同様に行われるため，朝鮮族学校の場合，漢語文の時間が漢族学校の学生よりも負担になっている。学校の授業時間数が限られているため，朝鮮語を重視するということは，一般的に言えば漢語を軽視することであるが，この場合授業時間数を増加させることによって対処していることになる。

漢語の扱いに注目すると朝鮮族学校において漢語と朝鮮語の位置が逆転する1958年がターニングポイントになっている。この逆転の要因は既述したとおり政治的圧力であった。

だが，王瑜が指摘するとおり，現在朝鮮族知識人は，50年代後半の整風運動時，及び文革時の朝鮮語が制限された時期を必ずしも否定的にとらえず，二言語の使用に効果的であったと論じていることである[48]。確かに1958年以前は教授言語が朝鮮語だけであった延辺大学に漢語が導入されたのは左の影響をうけた大躍進による政治的圧力であったが，その後漢語を教授言語として廃止しなかったのは，延辺大学自身の判断からであった。その理由は，延辺大学元校長李義一も指摘したとおり[49]，教授言語が全て朝鮮語であった当時の卒業生の漢語能力では職務遂行上支障をきたしていたからである。ただし，その後文革前の時期はすべてが漢語による教授となったが，その時低学年学生の約15%は授業に支障をきたし，さらに卒業後民族中学や民族新聞・出版関連の仕事に支障をきたしていたという問題も同時に抱えていたのである。

こうした経験を踏まえて，延辺大学の元校長朴奎灿がこの点に関して以下のように簡潔にまとめている。高等教育段階の教授言語は，漢語に支障がなければ漢語がよい[50]。（延辺大学では1983年から各師範専業の基礎課を漢族・朝鮮族別にそれぞれの教授言語で授業をしている。それ以外の課は，特に朝鮮族学生のために設けられた朝鮮語や朝鮮芸術関連の課以外は漢族・朝鮮族の混合班で漢語で授業をしている[51]。）少数民族学生を対象とした民族班でも，専業の種類を文，理，技術系に分ければ，技術系は漢語がよい。文，理系のうち師範系以外はやはり漢語がよい。師範生も高学年になれば漢語がよい[52]。高等教育の目的は専門人材の養成にあり，そこではやはり漢語での授業が望まし

いのである。

これは，漢族側からの政治的圧力のためではなく，朝鮮族知識人自身による，現状を考慮した上での結論なのである。そして，実際，この考えを先取りするかたちで，朝鮮族の高級中学でも，数理系の科目を漢語を用いて授業を行っている[53]学校がでてきているのである。結局，朝鮮語の権益拡大と漢語能力の向上という二律背反的な問題を同時に達成できるようにすることが，延辺朝鮮族のこれからの使命ということになる。そしてこれは，古くて新しい問題なのである。

むすび

こうして朝鮮族は二言語習得をめざして現在奮闘しているのであるが，逆に漢族は朝鮮族自治州であるにもかかわらず，ほとんどが朝鮮語には習熟していないという点で不平等であることは確かである。延辺は朝鮮族の自治州であり，理想を言えば，朝鮮族が漢語学習を求められるのと同様，自治州内の漢族も朝鮮語に通じるべきである。延辺朝鮮族自治州の州条令には，自治州内の漢族中学・小学の学生が朝鮮語を学ぶことを提唱している（第五十三条）し，また漢族幹部が朝鮮語を学ぶことも求めている（第六十九条）。しかしこの「理想」はほとんど達成されていないのが現実である。実は，延辺がまだ混乱していた1946年に一度は，漢族学生には朝鮮語を，朝鮮族学生には漢語を週4時間教えることにしたことがあったが，その成果を問う前にすぐ廃止されている。

しかし，近年ごく一部ではあるにしても漢族側から朝鮮語を学ぼうとする動きがでてきていることは注目に値する。これは，近年，韓国資本が延辺に流入しており，朝鮮語を学ぶことによってより条件の良い職に就けるかもしれない思惑が漢族側で働いているからである。実際延辺大学でも近年漢族のための朝鮮語学科が設置されて，漢族が朝鮮語を学んでいるのである。このように，経済的な力関係は言語の優劣を決める決定要因になることをこのことは示している

また，延辺は，朝鮮族の人口が最も多い地区であり，朝鮮族文化を維持・発展させる中心地であることは間違いない。朝鮮語・朝鮮文学に関する教育・研究機関としての延辺大学や延辺社会科学院語言研究所，また東北朝鮮民族教育出版社では，朝鮮語の教科書を含めた出版物を発行して，全国の朝鮮族に向けて朝鮮文化のいわば発信基地となっている[54]。ただ，中国において朝鮮族の文化を維持・発展させるには，これだけにとどまらず，北朝鮮，韓国との関係を常に保つことが重要であろう。今後，さらに他の朝鮮語圏との連帯，特に北朝鮮及び近年特に交流が活発になっている韓国との交流を通して，朝鮮族文化を維持・発展させる必要があろう。このことが今後ますます重要になってくることは想像に難くない。

【注】

1）延辺は四縣（延吉，和龍，汪清，渾春）からなっていた。

2）沈茹秋『延辺調査実録』延辺大学出版社，1987年，15，16頁。

3）沈茹秋，同上，51，52頁。

4）高崎宗司『中国朝鮮族　歴史・生活・文化・民族教育』明石書店，1996年，18-26頁。
5）朴泰洙「建国前中国朝鮮族教育及其特点」『中国民族教育』1991年第2期，64頁。
6）個々の学校史については，政協延辺朝鮮族自治州委員会『延辺文史資料（第5輯)』，『延辺文史資料（第6輯)』1988年，を参照のこと。
7）沈茹秋，前掲書，64頁。
8）沈茹秋，前掲書，64頁。
9）崔斌子「〝九・一八〟事変前后的朝鮮族教育」『民族教育研究』1990年第3期，78頁。
10）崔斌子，同上，79頁。
11）崔斌子，同上，79頁。
12）崔斌子，同上，79頁。
13）それ以外に，日本人を対象とする日本人学校もあった。(5校，197人（韓生2人))。
14）延吉市教育志編纂委員会『延吉教育志（1901-1988)』1990年，2-4，76頁。延辺朝鮮族自治州教育志編纂委員会編『延辺朝鮮族自治州教育志　1715-1988』東北朝鮮民族教育出版社，1992年，47頁。
15）『延吉教育志（1901-1988)』，4頁。
16）李採畛，『中国朝鮮族の教育文化史』コリア評論社，1988年，40頁。
17）李採畛，同上，40頁。
18）『延吉教育志（1901-1988)』，4頁。
19）黄薬山「朝鮮族教育急議－兼談朝語和漢語的関係」『中央民族学院学報』1988年第3期，46頁。および『延吉教育志（1901-1988)』，80頁。
20）終在彦『満州の朝鮮人パルチザン』青木書店，1993年，186頁。
21）崔斌子，前掲論文，81頁。
22）姜永徳「延辺民族教育三十五年的歴史経験」『延辺大学学報』1981年第1-2期（社会科学版)，6頁。
23）『延吉教育志（1901-1988)』，9頁。
24）『延辺朝鮮族自治州教育志　1715-1988』，114頁。
25）『延吉教育志（1901-1988)』，103頁。
26）姜永徳，前掲論文，7頁。
27）『延吉教育志（1901-1988)』，11頁。
28）李採畛，前掲書，72頁。
29）『延吉教育志（1901-1988)』，105頁。
30）李義一「総結民族教育的経験　加強延辺大学的建設」『延辺大学学報』1981年第1-2期（社会科学版)，8頁。
31）『延辺朝鮮族教育誌』，62頁。
32）王瑜「延辺地区双語教育探析」『延辺大学学報』1988年第4期（社会科学版)，71頁。
33）姜永徳，前掲論文，8頁。

34) 王瑜，前掲論文，72頁。

35) 王瑜，同上，72頁。延辺大学の学生のうち朝鮮族が約70%というのは現在も続いている。(中国社会科学院民族研究所・国家民族事務委員会文化宣伝部主編『中国少数民族語言使用情況』中国藏学出版社，1994年，216頁。)

36)『延辺朝鮮族教育誌』，51頁。

37) 小学校の中には第一学年から漢語学習を始めるところもある。(中国社会科学院民族研究所・国家民族事務委員会文化宣伝部主編『中国少数民族語言使用情況』中国藏学出版社，1994年，217頁。)

38) 姜淳和「対延辺朝鮮族語言使用情況的調査」『延辺大学学報』1994年第1期（哲学社会科学版)，101頁。

39) 朴奎灿，前掲論文，63頁。

40)「延辺朝鮮族自治州自治条例」『中華人民共和国民族自治地方自治条例彙編　1985-1988年』海洋出版社，1992年。

41) 王瑜，前掲論文，73頁。

42) 延辺大学「堅持社会主義方向　発展民族高等教育事業」『教育研究』1979年第4期，67頁。

43) 黄薬山，前掲論文，50頁。

44) 王瑜，前掲論文，73頁。

45) 朴松山「加強漢語教学是朝鮮族教育改革的戦略性任務」『民族教育』1986年第4期，25頁。

46) 黄薬山，前掲論文，49頁。

47) 黄薬山，同上，49頁。

48) 王瑜，前掲論文，72頁。

49) 李義一，前掲論文。

50) 朴奎灿「民族高等教育教学用語的再探討」『教育研究』1984年第8期，64頁。

51) 王瑜，前掲論文，72頁。

52) 朴奎灿，前掲論文，61頁。

53)『中国少数民族語言使用情況』217頁。

54) 吉林延辺朝朝鮮自治州民政府「樹立全局観念保証各民族教育共同発展」『中国民族教育』1991年第3-4期，80頁。

Developing the Idea of Respecting Minority Cultures in China

——Language Problems in Yanbian Korean District——

Yoshikazu OGAWA*

The purpose of this paper is to discuss developing the idea of respecting minority cultures consisted of 'ethnic equality' idea by Chinese Communist Party through the case of Yanbian Korean District, northeast part of China. This district used to be a part of Manchuria where the population of Korean exceeded that of Chinese, and have had many Korean schools since 1910s. So it has become a developed area on minority education and is one of the most appropriate area to analyze the problems of respecting minority cultures. In this paper Korean language is focused especially because ethnic conflicts have been heated up about how minority languages are dealt with in minority schools.

Yanbian is a place where many Korean moved to live from Korean Peninsula since the end of 19th century and was politically very complicated area because it is located between Russia and Korea. Korean people had a strong ethnic identity and built Korean private schools at that time to keep their culture although authorities that governed this district – Qing Dynasty, Chinese National Party, Japanese Empire and the Manchuria Government often gave pressures against them. Authorities wanted to control Korean schools by reorganizing private schools to public ones, which usually meant prohibiting the use of Korean language.

Contrary to those authorities, Chinese Communist Party acknowledge their culture and language actively which other authorities denied in order to unite a nation by beating Chinese National Party. Korean school systems using Korean language were expanded as soon as new China was built. That process, however, also meant clearly Korean was a member of Chinese people. Because Chinese Communist Party denied strong Korean ethnic identity, the balance between Korean power and Chinese one was always a delicate matter. When Chinese power overwhelmed Korean ones at the time of Great Progress and Cultural Revolution, Korean language was attacked and prohibited in Korean schools like Manchuria days.

After Cultural Revolution, Korean language was recovered again in Korean schools, but a heated issue - the balance between Korean and Chinese still remains. Through these experiences Korean people learned that they had to improve their bilingual abilities though it is a difficult matter. In fact from some statistical data, we find there are not many Korean people who are bilingual. Therefore, Korean educational system needs to be organized better and more perfect not to be disadvantageous even for Korean who are not good at Chinese language

* Research Associate, R.I.H.E., Hiroshima University

than before if the status of Korean language get close to that of Chinese one.

Chinese language, however, is a mother tongue for 92% people in China, and Chinese and Korean are not equal (one is 'national language, the other one of minority languages) though equal by law. Moreover, among real society, Chinese language becomes key for success in life such as better employment and success of entrance examinations. Then Korean people, not Chinese government, want to strengthen Chinese language in Korean schools for the future of Korean people these years. That is a kind of an ironical issue − in order to keep Korean's culture they must strengthen Chinese because they lose their own language as a core of their culture if all of them go to Chinese schools for future success. (Especially, at higher education level such as Yanbian university, Chinese is usually used as instruction language.)

To pursue expanding Korean educational system and strengthen Chinese simultaneously is a current conclusion Korean people reached from many experiences. That is an old and new issue in multicultural society.